

2030年の私、 そして学校は？

すでに始まっている未来の数々

学校改革は、学校の教育方針、全教職員の考え方、生徒の実態やその時の課題とすり合わせながら進むと思います。その一歩目は、未来社会を担う生徒を育てるために、自身や学校がこの先どうありたいか、一人ひとりの先生が「思い」をもつことではないでしょうか。4名の先生に、10年後の「2030年の私、そして学校の姿」を自由に表現してもらいました。「計画ではなく夢や妄想でも良い」という設定の下、先生たちの生徒や教育に対するさまざまな思いがあふれ出てきました。ぜひ、皆さん自身も「理想の2030年」をイメージしてみてください。

※各先生に聞いた「2030年の私」↓①その時の教員歴は？
②その時はどんな立場か？ ③どんな働き方をしていたか？

2030年の私

- ①教員歴25年目
- ②聖学院で現場にいたい
- ③学校と地域をつないで、デザインベースの授業をしたい



山本 享先生
聖学院中学・高校(東京・私立)

公立高校の非常勤講師を経て、2006年より聖学院中学・高校に着任。保健体育科。2017年にLEGO® SERIOUS PLAY®トレーニング修了認定ファシリテータ取得。LEGO®を通じて、校外の多様な人々との協働活動にも励んでいる。

誰もが自由に集まれる学校で
生徒とフラットな存在でいたい

Creation

1



山 本享先生は、授業や学校行事を通じてPBLに積極的に取り組んでいる。PBLや自身の思考を整理するときにはブロックを活用することが多いという。今回も2030年の理想の姿を表現してくれた。

「2030年の学校は、敷居や柵がなく、本校の教育方針に興味がある生徒みんなが集まってほしい。極論を言えば入試はなくなつていい。学校は、地域や誰かの役に立つプロジェクトを回す場で、その土台として知識をキャッチしていく。生徒たち一人の力は最初は小さくても、プロジェクトを通じて大きなことを動かしていく。自分自身は生徒たちと一緒に考える、フラットなプロジェクトの一員として、学校と社会をつなぐ役割でいられたらと思っています」

現在も学校内外でさまざまな役割を担って活動している山本先生。個人のテーマとして「教育格差」と「地域活性化」の研究にも取り組んでいる。「例えば、他校にも素晴らしい先生がいらつしゃいますが、現状ではその先生の授業はその学校の生徒でなければ受けることができません。枠組みを越えて教育や学校をもっと公共に開いたものにできないかと考えています。自分も教員として他校の生徒とも関わりたいです。私立校の教員らしくらぬ発想ですが(笑)」

開かれた学校への一歩として、現在でも学校行事を活用したPBLで、地域活性の取組を実施。生徒たちが自走し

取材・文/長島佳子

ダウンロード可

※各先生が写真で表現した内容の詳細はキャリアガイダンスのホームページへ

2030年の私

- ①教員歴30年目
- ②教員にはこだわらない
- ③共に学ぶ人のワクワクに寄り添うファシリテーターの役割をしていきたい

て飛躍的に成長している。そうした生徒の姿を見ることで、活動の輪を他の先生や学校全体にも広げていきたいと考えている。

10年後は47歳になっている山本先生。どんなポジションであっても、生徒たちと関わり、変化をダイレクトに感じられる第一線にいたいことが希望だ。

変化と挑戦を続けながら、みんなに寄り添える存在でいたい

「教員が楽しんでる学校でない生徒たちが楽しいはずがない。自分もずっとワクワクしていたい。どんな立場でも現場にいられる職場づくりをしたいですね」

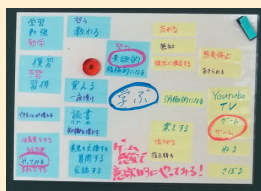
現在の自校の課題は、生徒の多様な個性を伸ばしきるノウハウが完成してないこと。未来の学校は、PBLの中

で互いの個性を認め合い、輝き続けられる場にしたいと考えている。

「PBLも、プロジェクトベースから発展して、課題を生徒たちが次々と見つけてくるようなデザインベースにしたいです。それができてこそ、未来を創造する人材になれると思います」

Creation

2



藤村先生が昨年4月に実施した「学ぶとは?」のホームルームで、生徒たちが作成したもの。

「No one will be left behind!」など、まさに生徒たちが主体的に、共に学びたいと考えているが見えてくる。

なぜ藤村先生の生徒たちはこのように考えられるのだろうか。先生は昨年の4月の始業式翌日に、「学ぶとは?」というホームルームを行っている。「学ぶ」から連想される言葉、反対語などを生徒たちが書き出し、なぜ学ぶのか、どのように学びたいのかを考えてもらい、1学期の終わりに振り返りを実施。3カ月間の自分の成長を言語化した内容が模造紙にびっしりと書かれていた。

藤村先生のモットーは「無理をしない」「自分を信じる」「勇気をもつ」。自分がいつもワクワクしていたいから、ありのまままで無理をしない。自分に自信があるのではなく、何があっても、失敗しても「自分は大丈夫」と思える心があれば、生徒にも失敗を恐れず挑戦することを促せる。失敗を反省するのは大事だが、「いいところをもっと良くするにはどうするか」を考え、次にチャレンジする勇氣をもつ方がより大事だからだ。

「世の中も学校も『変えられる』ことを信じて。だから学校や教育を良くするために、仲間をもっと増やしてみんなでチャレンジできる環境をつくっていきたいです」

目下の関心はIBDP*開始に伴う評価の見直し。藤村先生なら2030年を待たずに実現していそう。



藤村祐子先生
虎姫高校(滋賀・県立)

滋賀県の公立高校を歴任。教員当初は部活に注力したバスケット人間だった。2015年より滋賀県総合教育センター・研修指導主事、2019年より現職。化学科。

2

018年度まで滋賀県の総合教育センターで研修指導主事を務め、自らもコーチングやファシリテーションを学んできた藤村祐子先生。昨年、SSH・IB認定校である虎姫高校に現場復帰してから、校内で教員向けのワークショップを開くなど、学校に新しい風を吹かせている。そんな藤村先生はKPF法で2030年の姿を描いてくれた。

「2030年の学校は、生徒だけでなく教員も保護者も、すべての人がボーダーレスで共に学ぶ場であってほしいです。みんなが自分の学びたいことをワクワクしながら学べる場。テストだってワクワクする、自分を表現できればOKというものにした。その時は教員だけでなく、共に学ぶ人々に寄り添えるファシリテーターでありたいですね」

藤村先生がこう発想した理由のひとつには、担任をしているクラスの生徒たちに「みんなの未来の理想の学校は?」と尋ねた問いへの答えがある。「自分で課題を設定して、先生がそれに伴走していくスタイル」「自分のための勉強がしたい」「生徒が授業をしてほしい」「保健室にいる生徒に対して、スマホなどを使用して授業を配信する」

*IBDP=国際バカロレアディプロマプログラム



2030年の私

- ① 教員歴25年目
- ② 教員という立場を続けているかわからない
- ③ その時に面白いと思った働き方をしていたい

倉本 龍先生 学校法人角川ドワンゴ学園 N高校(広域通信制・私立)

広島大学大学院で教育学を専攻。京都の私立中学・高校で理科教員を歴任。早くからICTを授業に取り入れ、SSH主任など新しい授業の取組に注力。2019年、N高校の京都キャンパス開校とともに京都キャンパス長として着任。

不易流行のバランスをもちながら、「教育」という言葉をなくしていきたい



Creation **3**

ダウンロード可



「2030年は予想がつかない」と語る倉本先生が選んだ表現が、時間と空間を超えるツールとして便利なZoomでの、学校スタッフの方々とWeb会議。

ネットの学校として話題を呼ぶN高校に昨年着任し、京都キャンパス長として活躍する倉本龍先生。2030年の姿について聞くと、開口一番こう答えた。

「正直、全然わかりません。10年後は僕らの想像を超えている未来ですから」

大学院時代、イギリスの学習指導要領にあたるナショナルカリキュラムに「Citizenship」という言葉があることに興味をもった。また、ICTは筆記用具と同様なツールとして早くから取り入れており、教員になった当初から専門の科学とITと社会課題を融合させた取組を発信してきた。今言うSDGSのような取組だ。

「当初は職場では変わった人扱いでした(笑)。でも、SSHや探究の授業づくりや、面白いことを多々やらせてもらってきました」

常に新しいことに挑戦する場を求めてきた倉本先生だが、時代の流れの速さに未来はまったく予測不可能と語る。「2020年の頭で考えていても意味がないので、教員も日々自分をアップデートしていかねばなりません。22世紀を描いたドラえもんも道具が、2020年に似たようなものが実装されている時代です。未来は予測不可能だということを知り受けとめて、そのうえで自分がどう行動するのが求められる時代だと思います」

自分をアップデートするとともに、変化が激しい時代でも、先人たちが築いてきた教育の哲学や叡知を引き継ぐ不易流行が大事だと何度も繰り返す。電気自動車や、電池に使われる直流電源も100年前にエジソンが作った。先端技術は、昔からあったものを時代がカスタマイズしたものも多い。

「2030年の教育は、今ある教育のカスタマイズかもしれない。学びたいことを学ぶカスタマイズドラーニングをやりたいですね」

倉本先生の方針は、生徒たちに「自分なりの活動と信念をもち、自信をもって他者に説明できる人財」になってもらうこと。時代は変わってもそれは変わらないと言い切る。

さらに、2030年になくしたいものは「教育」という言葉だ。

「『教養教育』って教員視点で型にはめ込むようでおかしい。生徒はもっと先を行きますから。『Education』はいいと思うのですが、ふざかしい日本語がまだ見つからず、探し続けています」

2030年には倉本先生考案の新しい言葉が普通に使われているかもしれない。

ダウンロード可

※各先生が写真で表現した内容の詳細はキャリアガイダンスのホームページへ



Creation 4

自分が動くとは何かが変わる 見えない風を地域で起こしたい

地

地理歴史・公民を担当する三浦学先生は、授業に探究学習のよきな問いづくりを取り入れ、実社会と結びつける授業を実践している。その際のツールとしてイマコラボが開発したカードゲーム「2030SDGs」を導入。先生が描く2030年をそのカードで表してもらった。

取材当日、三浦先生は予め6枚のカードを選んでくれたが(下の写真)、描く未来を語り続けるなかで12枚のカードが追加されていた(上の写真)。最初の6枚のカードは、既に三浦先生が生徒たちと取り組み始めている内容だったからだ。今までに出会ってきた人や書籍から受けた影響、授業を変えてきたこと、生徒たちの成長などについて振り返りながら、10年後にやりたいことは、故郷の地域振興もあると、目を輝かせながら思いを語ってくれた。

転機は2011年の東日本大震災。震災の直後に、当時石巻にあった公立の女子高校へ転任することになった。「被災して不安で寂しかったにもかかわらず、生徒たちが明るくて非常に前向きでした。震災でも彼女たちの夢は消えていなかった。むしろ、ちょっと高望

みな夢でしたが、本人たちの『やりたい、がんばりたい』という意志に、『何とかしてあげたい』と私の方が背中を押された感じです」

生徒たちは三浦先生をはじめ学年の先生方の後押しで夢を叶え、「伝説の学年」と呼ばれた。石巻の学校は統合前の最後の学年でもあった。最後の学年を輝かせたいと新しい取組や学年での協働体制が生まれ、授業や部活において、生徒たちがチャレンジすることの大切さを学んだ。

また、震災から復興していく石巻の町を見ながら、「経済と社会と環境が調和しなければ、世の中は豊かにならない」と体感。そのことを生徒たちと一緒に考えていきたいと思い始めていた。数年後に発表されたSDGsに、「これだ！」と確信。参加した勉強会でカードゲームを知り、早速、現代社会や地理の授業に取り入れてみると、生徒たちが世の中の課題を自分ごと化して考えることにつながっていったという。

「カードゲームもそうですし、探究の授業も、とりあえず自分が働き掛けて回していくと周りも動き始める。地理の授業用に作った問いづくりのワーク

シート※を、生徒が進学や就職に向けての準備にも汎用させて利用し始めるなど、自分が新しいことを始めると、何か周りも変わっていく。だから、まだ世の中のない、見えない風を起こしながら、学校や生徒をもっと良くしていきたい。それを続けることで、過疎化している故郷の町をなんとかしたい。地域振興と学校のコラボで、2030年には本気で町をよみがえらせたいですね」



ダウンロード可

2030年の私

- ①教員歴32年目
- ②学校にどういったポジションで関わっているかわからない
- ③新しい何かを引き起こし、次世代に引き継いでいきたい

三浦学先生
宮城第一高校(宮城・県立)

宮城県の公立高校を歴任し、2015年より涌谷高校、2020年より現職。地理歴史・公民担当。2030SDGsカードゲーム公認ファシリテーター、SDGs for School 認定エドゥケーター。



皆さんが描く 2030年の学校の姿は？

4人の先生が描いた2030年の姿は、先生たちが“今”抱いている、
学校や教育の在り方、そして生徒たちへの思いから始まっていました。

未来はすでに“今”の中にあるのかもしれない。

皆さんはどんな未来を描きますか？



社会は
どう変わっていますか？

卒業生はどんな活躍をしている
と思いますか？

教員歴は何年目？
どんな分掌・立場にいますか？

あなたの授業を受けている
生徒の反応は？

学校や教師の役割って
変わっていますか？

その時、あなたは
教員をしていますか？

